# 「暇人(ひまじん)が読(よ)む二人制審判員(ににんせいしんぱんいん)の瓦版(かわらばん)」No,13　2024/2 月号

発行者　　むらおか　かずひと

## 1 塁線のライナー

2023/9/24

私が塁審に入った試合で、走者なしの時、三度も 1 塁線フェア地域に鋭いライナーが飛んできた。二度目の時、1 塁手が左手にはめたミットを伸ばして捕球しようとした時、ピチっとミットに触れた音がして後方に抜けていった。本塁方向に正対したまま私は右手でフェア地域にポイントして内野内に切り込みピボットをした。2 塁打になったケースである。試合後、控えの同僚によると、1 塁と本塁の延長線で見ていたが、ライナーはファウルラインのわずか外に落ちたのでファウルだと思ったそうである。勿論、私は落下地点を見ていない。ベンチからは抗議はなかった。見ていた人の中には、同僚と同じように見た人もあったかもしれない。**わかりやすいジェスチュアーを入れてからポイントした方が良かった**と反省した。

## よく読んでみると

2023/9/28

6.01(g)の「スクイズプレイまたは本盗の妨害」には、「捕手またはその他の野手がボールを持たないで、本塁の上またはその前方に出るか、あるいは打者または打者のバットに触れたときには、投手にはボークを課して、打者はインターフェアによって一塁が与えられる。この際はボールデッドとなる。」と記されている。

6.01(c)の「捕手の妨害」には、「妨害にもかかわらずプレイが続けられたときには、攻撃側チームの監督は、そのプレイが終わってからただちに、妨害行為に対するペナルティの代わりに、そのプレイを生かす旨を球審に通告することができる。」と記されている。ただし、同【注 2】には、以下の二通りの記載がある。

「三塁走者が盗塁またはスクイズプレイで得点しようとしたときに、この妨害があった場合にはボールデッドとし、三塁走者の得点を認め、打者には一塁が与えられる。」この場合、6.01(h)【注 2】には、「すべての走者は、盗塁行為の有無に関係なく、ボークによって 1 個の塁が与えられる。」

また、6.01(c) 【注 2】後段には、「三塁走者が盗塁またはスクイズプレイで得点しようとしていなかったときに、捕手が打者を妨害した場合にはボールデ

ッドとし、打者には一塁が与えられ、そのために塁を明け渡すことになった走者は進塁する。盗塁を企てていなかった走者と塁を明け渡さなくてもよい走者とは、妨害発生の瞬間に占有していた塁にとめおかれる」と記されている。

解説すると、捕手や野手が**打撃妨害**をしたとき

(1) **走者が３塁にいる場合**は、即**ボールデッド**で

① **３塁走者が盗塁またはスクイズのとき**は、**打撃妨害**と**ボーク**を適用する。
② **３塁走者が盗塁またはスクイズではないとき**は、**打撃妨害**と**盗塁行為をしていた他の走者のみ次塁**へ

(2) **走者が３塁にいない場合**は、妨害にもかかわらず**プレイは続けられ**攻撃側の**監督権の行使**が可能となる

上記の結果、**走者が３塁にいる場合**は、打撃妨害にも関わらず長打となった場合でも即**ボールデッド**になる。するとホームランになった場合、攻撃側の不利な状態となってしまうケースになりかねない。今までに長打になるようなことがなかったからだろう。将来、改正される可能性がありそうな項目だと感じた。この件については、後日、瓦版で取り上げる可能性がありそうである。

投手の交代

2023/10/1

攻撃が終わり、ベンチから選手がそれぞれの守備位置まで駆け足で向かって行く。今までの投手もボールを持って投手板に軸足を置いて投球練習をしようとしたとき、監督が投手の交代を球審に申し出てきた。これが可能かどうか皆さんならお分かりであろう。

5.10(i)「すでに試合に出場している投手がイニングの初めにファウルラインを越えてしまえば（競技者必携では下線部を『**準備投球のために投手板に位置してしまえば**』に読み替えるという解釈をとっている）、**その投手は、第１打者がアウトになるかあるいは一塁に達するまで、投球する義務がある**」よって、上記の例は、**投手交代はできない**ことをしっかり覚えておこう。

「ただし、その打者に代打者が出た場合、またはその投手が負傷または病気のために、投球が不可能になったと球審が認めた場合を除く。」とあるので、

代打者が出た場合は、交代は可能である。

外野からの送球がボールデッドの箇所に入る

2023/10/1

無死、走者1塁のとき、打球を処理しようとした二塁手がエラーし、打球は外野へ抜けて行った。1塁走者は2塁を回り3塁へ向かったので外野手は3塁方向へ送球、途中カットマンが入って3塁へ送球したが、その送球が悪送球となりボールデッドの箇所に入ってしまった。球審と塁審は相談し、1塁走者を本塁へ打者走者を3塁で再開しようとしたのを控え審判員の私は、納得して目線をはずした。しかし、その後、気づいた時には走者2･3塁で試合を再開していたのである。カットマンが送球したときには、当然1塁走者は2塁を回り3塁へ向かっていた。また、打者走者は1塁を回っていたので、正しくは1塁走者のホームインを認め、打者走者は3塁へ進めなければならなかったのである。複数の走者がいるときに送球がボールデッドの箇所に入ってしまうことはよくあることである。悪送球がリリースされたときに各走者がどこにいたのかをチェックしておく必要があるが、それができなかった場合に自分たちを助けてくれるものがある。それは、**カットマンが入ったか入らなかったかを確認しておくこと**である。カットマンが入ったときは高い確率で打者走者は1塁を回っている。勿論、1塁走者は3塁に向かっていたのだから送球を3塁にしているのである。リリース時点で2塁は回っているから、当然本塁まで行かせなければならない。冷静に考えると判断できるのだが、冷静さを失ってしまい判断を誤ってしまったのである。普段から外野からの返球時に**カットマン**が入ったか入ってないかを確認する習慣をつけておくべきである。

とんでもない事態が起きる

2023/10/7

中学新人戦の準々決勝の試合は、タイムブレイクにもつれ込み、先行チームが2点を入れて後攻チームの攻撃に移った。2点を返し同点後のノーアウト2・3塁でそれは起きた。打者の打球が前進守備をとっていた遊撃手の左を抜けた。そして、エラーでもなく遊撃手に触れてもいないこの打球が走ってきた2塁走者に当たったのである。ショート前に位置していた塁審は2塁走者にアウトのコールをした。その間3塁走者は本塁を駆け抜け、攻撃側チームは歓喜に包まれ本塁前に整列し始めた。球審も集合をかけたために、攻撃側だけでなく守備側の選手も整列し、**球審がゲームセットをコールしてしまった**のである。控えにいた審判員がこれを止めて、塁審に打球が2塁走者にあたりアウトにし

たことを確認して、**ボールデッド**になるので３塁走者のホームインは無効であり、３塁走者を元の塁に戻さなくてはならないから、試合を終わらせてはいけない旨を伝えた。それを聞いて塁審は**ボールデッド**になったことに気づき、球審に伝えて、すぐに１アウト走者３・１塁で試合を再開させることになった。これに対し勝利したと勘違いしたチームの応援席から激しいブーイングが起きた。まず、反省しなければならないのは、二人の審判員がルールに精通していなかったことである。そして、得点が入っていないことを両監督に納得させる説明ができたかどうかである。更にゲームセットを宣言した後で試合のやり直しができるかという点である。勝ち越し点が入っていないにもかかわらず一方に勝たせて試合を終わらせることはあってはならないことである。そのため、非難を浴びても頭を下げて１アウト走者３・１塁で試合を再開すべきであると私は考える。そんなルールがどこにあるのだと言われたら、8.01(c)「**審判員は、本規則に明確に規定されていない事項に関しては、自己の裁量に基づいて、裁定を下す権能が与えられている。**」を適用するしかない。感情的になって審判員に罵声を浴びせているチームの役員には「勝ってもいないのに球審がゲームを宣告したからと形式的なことを取り上げて、非道な勝利をもぎ取ることを少年たちに経験させたいのですか」と健全な指導をとるように説得すべきである。また、このとき、球審が「集合」をかけ本塁に整列させてゲームセットをコールしたのであるが、試合によっては、試合を終了させるために審判員が集合をかけることを控えたほうが良いケースがある。なぜだろうか？例えばアピール権が残っている場合があるからである。試合終了のための整列をしてしまえばアピールできなくなる。私たちが何気なく行っている事を「やるべき」か「やったほうが良いのか」「やってはいけないのか」を考えてみるべきである。今回は勿論「集合」をかけてはいけないケースである。球審も塁審も大いに反省すべき出来事であった。

ちなみに、走者がフェア地域でフェアの打球に触れても**ボールインプレイ**のケースがある。「投手を含む内野手にいったん触れた打球」と「投手以外の内野手に触れないでその股間または側方を通過した直後にその後方で触れた場合でも、他の内野手も守備する機会がない」と判断された場合である。
6.01a(11)、5.06c(6)参照。

タイムプレイではないが

2023/10/14

1アウト走者2塁、打球は左中間に高いフライがあがった。2塁走者はエンド ランがかかっていたのか迷うことなく3塁を回り本塁に走りこんできた。フライをキャッチした中堅手は2塁に送球、2塁手がリタッチのアピールをしたので塁審が第3アウトのコールをした。2塁走者はこの第3アウトよりも早く本塁を通り過ぎていたので、タイムプレイではないが、先週の試合の様に得点が入ったと勘違いすることがないように球審の私は「ノーランスコア」を連呼した。常にわかりやすいジャッジを心がけることは大切な審判員の務めである。

## 試合中の審判員の動き

2023/10/15

我々審判員は、試合中に随分無駄な動きをしてはいないだろうか？また、だらだらと動いてはいないだろうか？「きびきびとした動き」や「静と動を使い分けた動き」を心がけているだろうか。ジャッジするだけが審判員の仕事ではない。イニングの合間も仕事はあるのである。どんな仕事があるのかを考え試合をコントロールする力を身につけていこう。毅然とした態度や落ち着きのある姿、次のプレイを読む能力と動きをする努力を心がけていると自然と信頼性が身についてくるものである。この記事を読んだら、まずひと月間自分なりに取り組んでみよう。

## またこのケースだ

2023/10/22

1アウト走者2・3塁で、3塁走者の3本間で挟殺プレイが起きた。以前の瓦版でも取り上げたことがあるプレイである。今回も球審が3本間を一人で担当し、塁審はショート前から動こうとはしなかった。何故なら2塁走者に送球が振られたら対応しなければならないという理由からである。しかし、3塁走者を球審だけで担当するのは、とても荷が重い。球審が本塁からあまり離れていない位置で3塁付近のタッグプレイを正確に判断することが難しいからである。このプレイは、まず3塁走者を球審と塁審の二人で挟んで3本間を半分ずつ担当し、球審が3本間の真ん中くらいまで上がったら、「I’ve got this all.(この全部 私が引き受けた)」とコールして、塁審に他の走者を担当させるのである。それまでは二人で本塁に一番近い3塁走者を担当するべきである。この間2塁走者に送球が振られる確率は非常に低いし、送球されるとしたら3塁走者が塁に戻るかアウトになった後である。難しいプレイであるが頭にしっかりと叩き込んでほしい。

## 1 塁空過

2023/10/29

走者なし、内野ゴロで 1 塁への送球、打者走者の方が一瞬早く 1 塁を駆け抜けたがベースを踏んでいなかった。塁審はセーフのジャッジ。このようなケースはまれではあるが時々見受けられる。以前、当協会の会合でも取り上げたことがあるので理解している人のほうが多いと思われるが、今回の様にジャッジしてしまうことがないように再度説明をしておきたい。このケースは、MLB や WBC では、セーフのジャッジをすることになっており、アウトにするには、打者走者が 1 塁に帰塁するまでにタッグもしくはボールを持って 1 塁でアピールする必要がある。しかし、わが国では、NPB でもアマチュア野球でも 1 塁ベースを踏んでいないのにセーフにすることに根強い反発があり、アウトにすることになっている。将来は MLB の様にジャッジすることになると推察するがまだ 10 年は時が必要だろう。試合終了後の反省会で、上記のプレイで打者走者が 1 塁ベースを踏んでいなかったプレイのジャッジに話題が移ったが、塁審は空過したことに気付いていなかったそうである。良い送球が来たら目線をベースに据(す)えて、1 塁手のミットにボールが収まる音をしっかり耳で聞いてジャッジしよう。

## 日本シリーズ オリックス対阪神の第 4 戦で

2023/11/1

阪神は 1 勝 2 敗で甲子園球場にオリックスを迎えて第 4 戦を 1-3 とリードしていたが、7 回に同点とされた。更に 8 回表のオリックスは、1 死 1・3 塁で 9 番小木田敦也(こぎたあつや)(投手)に代わって T.岡田を代打に送り、応援のボルテージは最高潮に達していた。ここで阪神は石井大智(いしいたいち)から島本浩也(しまもとひろや)に投手交代、するとオリックスは代打の T.岡田に代わって安達了一(あだちりょういち)を代打に送ってきた。この場合、阪神は島本浩也から更に投手を交代できるのであろうか？

我々の野球では、このような場面はほとんどないのだが、さて可能であろうか。野球規則 5.10(g)には、以下の記述があるので見てみよう。「ある投手に代わって救援に出た投手は、そのときの打者または代打者がアウトになるか一塁に達するか、あるいは攻守交代になるまで、投球する義務がある。ただし、その投手が負傷または病気のために、それ以後の投手としての競技続行が不可能になったと球審が認めた場合を除く。」島本浩也投手の交代はできないのであ

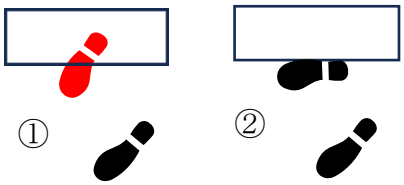
る。

ちなみに、今夜の第４戦は、８回表の猛攻を０点でしのいだ阪神が９回裏１死満塁から、不調だった４番大山悠輔（おおやまゆうすけ）のレフトへのサヨナラヒットで 3-4 の劇的な勝利をかざり、対戦成績を２勝２敗の五分としたのである。

## 各大会の審判長に望むこと

2023/11/13

今年の東ロータリークラブ杯で思うこと。2022 年に投球姿勢の変更がなされて、これで２年が過ぎようとしている。審判にとって非常に頭の痛い出来事と言わざるを得ない。何故なら、チームの監督・コーチや選手のなかには、この変更を理解していない者が未だに多くいるからだ。その理由の一つに、ワインドアップで行われていた投球動作のなかに、走者がいる場合にはセットポジションになるものとならないものがあるからである。例えば、セットポジションの場合、**軸足は投球版に平行に置き自由な足は投手板の前に置かなければならない**。しかし、軸足を平行に置かないで下図①の様に軸足を投手板に触れさせて、捕手のサインを見てから、下図②に軸足を移動させてセットポジションに入る投手が未だに多くいるからだ。これは**投球動作の変更**で**ボーク**である。




また、セットポジションは、「ボールを両手で身体の前方で保持して、**完全に静止**」しなければならないにもかかわらず、完全静止をしていないケースも多い。走者が３塁にいる場合でも静止できていないから審判員は非常に困るのである。NPB の様に一発でボークをとろうものなら審判にボークをとられて負けたといわれかねないので、ボークをとらずに黙認してしまう。これは、守備側に有利な判断となるのは否めない。野球規則の【6.02a 原注】には「**ボークルールの目的は、投手が走者を意図的に騙そうとするのを防ぐためであることを、審判は心に銘記しなくてはならない。もし、審判員の判断で投手の”意図”に疑いを抱いたら、審判員は厳重に規則を適用すべきである。**」と記されている。走者が３塁にいるときはボークをとらないでおこうという生ぬるさが審判員を苦しめる結果となるのである。

また、**セットを止める位置が途中から変わる**ケースもよく見受けられた。こ

れは、ボークではなく**注意**をすることになっている。

そこで、**大会の審判長は、大会前の監督者会議で、これらのボークをしないようにしっかり監督に伝えておくべきである**。それに対して、昨今の監督会議には、監督やコーチではなく、父母が代わりに出席する例が多いと聞く。だからと言って審判長は注意点を伝える意味がないと考えてはいけない。いうべきことを言わないでおくことは、審判長がやるべきことをやっていないことになる。説明内容をどう伝えるかは参加したチームの出席者の責任である。保護者が伝えることができなくてチームが不利益を被ることになった場合、それはチームの責任である。

球審は見ていなかった

2023/11/18

ノーアウト、満塁で投手のワイルドピッチ、捕手はボールを追いかけてバックネットに向かって走り、投手はホームカバーに向かったが、３塁走者はホームに滑り込み、得点が追加された。勿論、その間に他の走者は１つずつ進塁した。球審がタイムをかけてホームを履いている間、捕手と投手はホーム付近で立ち止まって話していたが、球審は気付いていなかったので守備側のタイムをカウントできなかった。ホームを履く前に、捕手と投手が近くにいる状態であれば、タイムをとらないで話し合うかもしれないと注意を怠らない姿勢がほしいと感じた。どうしてもホームを履きたければ、バッテリーが離れたのを確認してからにすべきである。

どの様にジャッジすればよいのか

2023/11/18

打者が打ちに行こうとしたときに腕に投球が当たった。ボールなのか、ストライクなのか、デッドボールなのか。このとき、まず考えなければならないのは、**スイングしたかしていないか**である。次にノースイングであれば**当たりに行っていないか**。よく、逃げていないからデッドボールではないという人がいるが、打ちに行っていれば、逃げることができないのでデッドボールとしなければならない。例えばバッターボックス内で腕ではない上半身に当たった場合、逃げていなくてもデッドボールをとらなければいけない。典型的な例が西部ライオンズや巨人で活躍した清原和博はバッターボックス内で上半身に投球

がぶつかってきた場合、けがをしないように体に力を入れてあえて逃げなかった。勿論、デッドボールで処理されていた。そんなところに投げる投手の方がいけないのである。痛い目をさせられてデッドボールをとってもらえないとなると打者は怒り出すことは勿論である。

## 学童大会は不思議なことが起きる

2023/11/19

今日は学童野球の瑞穂リーグのオールスターゲーム。小学4年生のリーグに加盟している各チームから選抜された選手がそれぞれのチームのユニホームを着て両軍に分かれての試合である。ノーアウト、走者1・2塁で打球はショートゴロ、ゴロをつかんだショートが2塁に送球し、塁審は2塁ホースアウトのコールをすると2塁に入ったセカンドが3塁に送球したがセーフ。すると3塁手が2塁に送球し走ってきた走者にタッグしたので塁審はアウトのジャッジをした。これで2アウトとなったところで、球審がタイムをかけて、塁審に駆け寄り、「今、2アウトですよね」と確認してきた。塁審は二人をアウトにしたので、「2アウトです。」と答えると、球審は納得してホームに帰っていった。しかし、アウトにしたはずの打者走者は1塁に残っていたのである。一瞬、「はて？」と塁審は考えた。実は1アウト、走者1・2塁で打球はショートに転がり、2塁でホースアウトになっていた1塁走者は1・2塁間の途中で、棒立ち状態でいる間に、送球が2塁から3塁に転送され、それを見て2塁に走ったと思われる。3塁手はそれを見て2塁に送球しタッグプレイが起きていたのである。つまり、1塁走者は2度アウトになっていたのであるが、塁審のアウトカウントの勘違いで、結果的には2アウト走者1・3塁の帳尻があった状態で試合が再開されていたのである。各チームのユニホームで参加することもチームをアピールするには良いのだが、では、どうすればこのようなミスを防ぐことができるのか。2人制の審判泣かせの一つである。塁審はボールに正対しプレイに対応しなければならないため、他の走者は視界から消えてしまう。球審なら広い視界の中で全体像を追うことができるため、補助的に全体を見る習慣をつけておく必要があると考える。

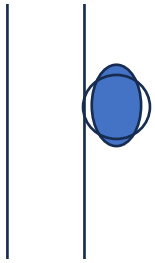
2023年のMLBのオールスターでは、ナショナルリーグ・アメリカンリーグともにユニホームカラーをそれぞれ統一したうえで、チーム名やイニシャルを

つけていたのは、審判員にとっても観客にとっても攻撃側と守備側を判別しやすい利点がある故の試みだと感じたのは私だけであろうか。

## 機械の波に押される野球

2023/11/21

米国のマイナーリーグでは、ストライク判定を機械に判断させ、球審はイヤホンから流れる判定をそのままコールするといったことが実験的に行われている。中には本塁上ではストライクではあるがワンバウンドした投球もストライクと判定され話題を投げかけた。ルールブックの定義 73(b)には、「打者が打たなかった投球のうち、ボールの一部がストライクゾーンのどの部分でもインフライトの状態で通過したもの」と記述されているからである。しかし、常識的にはインフライトでストライクゾーンを通過した投球がバウンドしたり、捕手のミットが地面についたりすればボールであることは多くの審判や選手なら理解していることである。ルールの内容にはアンリトンルールといわれ、ルールブックには記されていないが常識として現在でも守られているものが多くある。だから、現在のルールブックに記述されていないからといって無視することはできないものがある。以前、朝日新聞出版から「アンリトンルール」という本が出版されたこともあるようだが時代によって内容も変わっているかもしれない。話を元に戻して、球場のポールは「ファウルラインの延長」だと知っていただろうか。右図の様にライナーが外野のファウルラインの外側に楕円跡を残していったらどうジャッジするのだろうか。（〇はボールを楕円跡の真上に重ねた物）このファウルラインがポールなら、ポールにかすった飛球はホームランである。だからフェアということになっている。しかし、テニスやバレーボールの様にカメラ判定に依存した場合は、ラインに接していないのでファウルと判定される可能性がある。機械やカメラの導入によって、近い将来、かつての野茂投手や佐々木投手のホークボールはバウンドしても見送るとストライクと判定されてしまうことにもなりかねない。MLB のストライクゾーンは、以前アウトコースが非常に広かったがストライクゾーンが映像化されるようになって正確にジャッジされる傾向になった。我々の野球には実際に機械が導入されることはないが、少なからず影響はあるかもしれない。



アメリカのトリプルAの審判員として活躍している松田貴士氏の記事によると、2023年のトリプルAでは、ロボット審判ABS（Automated Ball/Strike System）がすべての投球判定を行い、金、土、日曜日のみ、チャレンジシステムと呼ばれる、投手、捕手または打者が判定に異議があった場合にチャレンジでき、ベンチから何かサインを送ったり、すぐにチャレンジの意思を示さなかったりした場合はチャレンジできないというやり方が試験的に実施されたそうである。

## こんな時のメカニックは？

2023/12/2

投球がストライクかボールのきわどい高さとコースに来た。打者はハーフスイングをして振り戻したがとてもきわどく、スイングもしくはノースイングか微妙であった。このような場合のメカニックを整理してみよう。

① ストライクと判定するなら、メカニックは「ストライク」とコールしよう。
② 投球判定はボールで、スイングと判定するなら、「イエス　ヒー　ウエント」とコールしよう。
③ 投球判定はボールで、スイングを迷ったなら、「ディドゥ　ヒー　ゴー？」と塁審に聞いてみよう。

## 3塁走者が走り抜けた

2023/12/4

相談が寄せられた事例を紹介すると、1アウト走者2・3塁でスクイズのとき、打者が空振りし、3・本間で挟殺プレイとなった。そのプレイの間に2塁走者は3塁に到達し、3塁走者はタッグを避けようと3塁ベースを通り越し3塁側のポール方向へ1.5m位のところまで行ったとき、野手が3塁を踏んでいる2塁走者にタッグし、その後に3塁走者がタッグされた。
相談者は以下の様に処置したのだが、これでよかったのかという相談である。3塁ベースについている2塁走者がタッグされたので、まず、セーフをコールした。その跡に3塁走者がタッグされたので3塁走者アウトをコールしたそうである。

「競技者必携 2023」の「規則適用の解釈」(6)「塁の占有権と走塁放棄との関連（規則 5.06a、5.09b(2)）」に以下の様に記載されているので、参考にされたい。「**走者二・三塁のとき、三塁走者が三・本塁間でランダウンプレイ中に二塁走者が三塁に到達して触れているとき、三塁走者がランダウンプレイを逃れて三塁を走り抜けた場合、三塁走者を走塁放棄でアウトにする。**」とある。また、**三塁を走り抜けた距離**がどのくらいであるかは記載されていないため、**審判の判断**に任されていると解釈すればよい。

本塁上のラインアウトについての訂正

2023/12/7

以前の我が協会の会合(審判会議)において、3 塁付近でラインアウトを取っていいのかという質問が出たことがあり、私はダートサークル内であればラインアウトを取るべきではないと発言したが、本塁をまだ触れてない走者が必死に本塁に触塁をしようとしている状態を想定してこのように発言したのであるが、「野球審判マニュアル第 3 版、第 4 版」で、以下のような解釈の記述があったので訂正をしたい。

「本塁に触れそこなった走者が、触球される前に触れなおそうと努力しているような普通のプレイの場合には、走者をアウトにするには触球が必要である。したがって、**そのケースでは走者には走路の規則が適用される**。つまり、**走者が野手の触球を避けて走者のベースパス（走路）から３フィート以上離れて走れば、走者はラインアウトでアウトが宣告される**。」

ステップボーク

2023/12/18

「ステップボーク」聞きなれない言葉であるが、6.02（3）に該当する「投手板に触れている投手が、塁に送球する前に、足を直接その方向に踏み出さなかった場合」のボークである。先述した松田貴士氏の記事によると、メジャーリーグでは「ステップボーク」に関しては抗議できないようになっているようだ。ステップボークの判定をした際は、ボークのコールの後に投手のフリーフットの太ももあたりを何度かタップしてステップボークであることを視覚的に伝えるように

なっており、それでもなおベンチを飛び出したり、自分のポジションを離れて抗議を行った際は警告が与られ、それでも続けた場合は退場になそうだ。

勿論、踏み出す前に身体の向きを変えて送球した場合も、ボークである。

しかし、メジャーリーグのボーク映像を見てボークと見極めるのが非常に難しいものもある。実際に塁審はアウトをコールしているが球審はボークを宣告するケースも多くある。ボークを判断しやすい角度と判断しにくい角度があるのは勿論だが、我々ではボークと気付かないボークが多くある。